

二つの〈永訣〉

——宮沢賢治『春と修羅』、中原中也『在りし日の歌』から——

岸 舞 香

私がこの本を初めて知つたのは大正十四年の暮であつたかその翌年の初めであつたか、とまれ寒い頃であつた。由来この書は私の愛読書となつた。何冊か買つて、友人の所へ持つて行つたのであつた。⁽¹⁾ (中原中也「宮澤賢治全集」)

第一章 「永訣の朝」

宮沢賢治『春と修羅』収録の「無声慟哭」三部作にはいずれも(一九二二、一一、二七)の日付が記されている。この日付は他でもない、賢治の妹・トシの命日である。この日付を、これら三部作の書かれた日と捉えると、「けふのうちに／とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ⁽²⁾」という「永訣の朝」の冒頭の文に疑問が残る。トシが亡くなったのは二十七日の夜八時三十分⁽³⁾であり、その日の朝にはまだ、トシが今日亡くなってしまうことはわから

ないのである。たとえ医者がそう告げたのだとしても、そんな不吉なことを、ましてや詩に書きとめないだろう。天沢退二郎は、「普通なら妹に対して死なないでなんとか耐えてもう少し生き延びてもらいたいとか、そういうようなことは全くなくて、もう死ぬことに決まっている、そういう姿勢がこの作品にはじめからある」と述べたあとに、「とし子が死んでから書いたには違いない⁽⁴⁾」と断言している。

『春と修羅』で日付が二重括弧で括られているものは他に、「春と修羅」「真空溶媒」「青い槍の葉」「原体剣舞連」のみである⁽⁶⁾。これらの詩の日付が二重括弧であるのは何らかの意味合いがあつたことであろうことは間違いないが、天沢氏も述べているように、特に「無声慟哭」三部作すべてがそうであるのは、三部作の日付が賢治にとつて特に大きな意味合いを持つものであつたからだと

言えるだろう。その大きな意味合いこそが、妹・トシへの追悼の意である。

「永訣の朝」の中で繰り返される「あめゆじゆとてちてけんじや」という部分はトシの言葉であり、賢治の注によると、「あめゆきとつてきてください」という意味であるという。何故わざわざ注を付けてまで花巻方言をそのまま記したのかについて黒沢勉は、「賢治の耳元に生々しく残っているトシの肉声を記録でもするように忠実に書きとめ、(中略)トシの最後の言葉がどれだけ重要であるかを示したものと見える。いたずらに標準語などに改変することはできないのである」と述べている。このトシの言葉は、「永訣の朝」において四度登場し、読者の脳内にありありと、トシの言葉がこだまするように響き渡る。

「みぞれ」が、溶けかけた雪と雨がまざっているものを指す⁽⁸⁾は言うまでもないが、大岡常樹は、「その雪は雨と雪とに別れた(藁)という二相系(固と液の二相)であり、それは二人の「別れ」を暗示する⁽⁹⁾」と述べている。実際に、一九二二年十一月二十七日に「みぞれ」は降っており、賢治はその事実に基づいただけであるかもしれないが、雪でも雨でもなく「みぞれ」を描くことで、愛する妹との「別れ」という悲惨な現実を、直接言葉にすることなく表そうとしたのかもしれない。

「青い蓴菜⁽¹⁰⁾のもやうのついた／これらふたつのかけた陶碗に／おまへがたべるあめゆきをとらうとして」の部分の「蓴菜」は、恩田逸夫の注によると、「スイレン科の多年生草本。湖沼に自生し、若芽・若葉は食用になる⁽¹¹⁾」という。若芽や若葉が食用になるということは、若い「蓴菜」の状態が最もポピュラーであり、「青い蓴菜」は若くして亡くなったトシの姿とも重なる。また、賢治は、大正七(一九一八)年三月に盛岡高等農林学校農学科第二部を卒業した後、引き続き地質学研究科に在籍して、大正九(一九二〇)年五月に終業、大正十(一九二二)年十二月には稗貫郡立稗貫農学校の教諭に就任、大正十五(一九二六)年三月末に退職し、独居自炊の農耕生活に入るなど、農耕や自然などに精通した人物であった⁽¹²⁾。そうしたことも、賢治が「蓴菜」を詩に書くことに影響を与えたのだと考えられる。

「わたくしはまがつたてつばうだまのやうに／このくらいみぞれのなかに飛びだした／(あめゆじゆとてちてけんじや)」という部分は、恩田氏の注によると、「妹の臨終にあたって、とり乱している心境が含まれている⁽¹³⁾」とある。さらには、「みぞれ」の降る中に勢いよく飛び出したのであるから、傘をささず間もなく、降り注ぐ「みぞれ」を避けるように姿勢を低く曲げていたその状況を、「まがつた」という表現に込めたとも考えられよう。

「銀河や太陽 氣圍などとよばれたせかいの／そらからおちた雪のさいこのひとわんを……／……ふたきれのみかげせきぎいに／みぞれはさびしくたまつてゐる」の部分、広大な「銀河」、その中にある「太陽」、その「太陽」が照らす地球の「氣圍」、その中の「そらからおちた雪のさいこのひとわん」と、視点が徐々に狭まっていくことが確認できる。

「わたくしはそのうへにあぶなくたち／雪と水とのまつしろな二相系さうけいをたもち／すきとほるつめたい雫にみちた／このつややかな松のえだから／わたくしのやさしいもうとの／さいこのたべものをもらつていかう」という部分の、「さいこの」という表現には、視点が徐々に狭まっていった先の到達地点という意味と、トシの「最期」という意味の二つが考えられよう。また、「ふたきれ」「雪と水」「まつしろな二相系」「松（松の葉は二つに分かれている）」「わたくしのやさしいもうと（『わたくし』と『いもうと』）などの対の表現があり、ここでも「別れ」が連想できる。「たべもの」とは、言うまでもなく「みぞれ」のことであるが、「みぞれ」は天から降ってくるもの、つまり天国の「たべもの」であると言える。「食べる」という行為について、特に冥界で食した人は、この世に戻ることはないと一般に信じられているのである。¹¹つまり、トシが冥界の食べ物である「みぞれ」を食べる行為は、すなわち「死」

を意味するのである。

「わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ／みなれたちやわんのこの藍のもやうにも／もうけふおまへはわかれてしまふ」の部分の「藍」は、「愛」と掛けているのではないだろうか。「ちやわん」は、家族という「愛」する者が集う場所に、いつもあったはずである。

「Ora Orate Shiori egunno」は、賢治の付けた注によると、「あたしはあたしでひとりいきます」という意味であるという。この部分がローマ字表記であるのは、時間の経過とともに今いる世界からもっと遠くの世界へ行ってしまうトシの様子を、日本から離れた外国由来の表記を用いることよって表しているのではないだろうか。また、弱ってしまったトシが懸命に絞り出した、たどたどしい言葉をありのままに詩に書こうとしたためでもあるだろう。

そして、本作には、父の言葉は記されていないが、堀尾青史によると、「トシ子、ずいぶん病気がかりしてひどかったなあ。こんど生まれてくるときは、人なんぞ生まれてくるなよ¹²」という父の発言に対する返答が、「うまれてくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる」であるのだという。賢治の注によると、「またひとにうまれてくるときは／こんなにじぶんのごとばかりで／くるしまないやうにうまれてきます」

という意味であるという。後に触れる、詩「無声慟哭」には、母と娘（トシ）の会話が記されており、堀尾氏は、三部作の作品について、「父母との感情交流は賢治の心象スケッチの方法によつて劇的に展開し、最高の詩となつている」と評価している。なにげない家族間の会話も、最期の時には、こんなにも脳内に響き渡つて消えないものなのかと、賢治を驚かせたことだろう。

「おまへがたべるこのふたわんのゆきに／わたくしはいまこころからいのる／どうかこれが天上のアイスクリームになつて／おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに／わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」の、「天上のアイスクリームになつて」という部分は、宮沢家所蔵本における自筆の手入れには、「兜率の天の食に変わつて」とある。恩田氏の注によると、「兜率天には弥勒菩薩が住み、釈迦如来の後継者として、仏滅後五六億七〇〇万年を経て、如来となつて衆生を救おうとして待機中である」という。賢治は幼い頃から仏教に親しんでおり、その仏教の要素が込められたものである。トシの死の際には、耳元へ吹きこむやうに御題目をとなえ、トシがうなづくやうにし、息を引き取つたのだといい、「わたくしはいまこころからいのる」以降の、「どうかこれが天上のアイスクリームになつて／おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに」という賢治の祈りは、天へと旅立つてい

く「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」のトシへ、御題目とともに捧げた祈りなのである。

「資糧」も、仏教に関わる言葉であり、「修行のための心がけを含めた準備、支度」であるという。また、恩田氏の注によると、「賢治において、資糧や食物は、人間の生存の機構や、生活の理想にかかわる根本的な要因としての意味を担つている」という。そのことは、農業を学び、農耕に精通していた賢治であるからこそよく理解していたはずである。生命にとって必要不可欠で、最も大切な「資糧」を、天界へ行つてももたらすやうにと、「すべてのさいはひをかけてねがふ」賢治の、妹・トシへの計り知れない愛情の深さがここから感じられよう。

第二章 「松の針」

「さつきのみぞれをとつてきた／あのきれいな松のえだだよ」という冒頭部分は、「さつき」という言葉から、三部作「無声慟哭」の二作品目「松の針」に流れる時間が、「永訣の朝」の直後であることがわかる。

「永訣の朝」では、「陶椀」に、「松のえだ」に乗っていた「みぞれ」を入れて取ってきたのに対し、本作では「松のえだ」ごと取ってきており、まずそのことに注目したい。「松」は、常緑樹である

ことから「不滅性」「不老長寿」を表すとされ、死者の遺骸を腐敗から守り、靈魂に活力を与える副葬樹として用いられることもあるという²¹⁾。また、「松」は和歌でも歌われることが多い。『万葉集』の、「立ち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かばいま帰り来む」（離別・三六五・行平）が、「待つ」の掛詞を織り込んだ名歌として知られている。さらに、「松」は「雪」と一緒に歌われることもあり、その場合、「松」は葉が細いので、雪は積もり難く消えやすいものとされていた。²²⁾「み山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり」（古今集・春上・読人不知）という歌では、「深山ではそのように残り難い松の雪でも消えずに残っているのに、都は……」の意で用いられているのである。²³⁾

以上を踏まえると、「松のえだ」ごと取つてきたとしたのは、第一に、「けふのうちに／とほくへいつてしまふ」トシの靈魂に活力を与えたいという思い、第二に、救つてあげられずただトシの死を「待つ」しかない賢治の嘆き、第三に、目の前で消えゆくこととするトシと消えやすい「松」の「雪」との重なり、そして第四に、「松」の葉が二本に分かれていることからトシとの別れの決心など、様々な意を込めたかったからではないだろうか。

「ああけふのうちに／とほくへさうとするいもうとよ」という部分は、「永訣の朝」に書かれている「けふのうちに／とほくへいつ

てしまふわたくしのいもうとよ」と似通つた表現であり、この言葉が「無声慟哭」三部作の根底にあるモチーフとなつていえると言えよう。また、前述した、「松の針」の「永訣の朝」との時間の連続性をも裏付けている。さらに、「けふ」という言葉の多用にも気づくことができる。「けふ」は「無声慟哭」三部作を通して計六回書かれており、このことは、「一九二二、一一、二七」が二重括弧で強調されていたように、「けふ」が特別な意味合いを持つていたことを示す重大な根拠の一つになり得るだろう。また、「おまへの頬のけれども／なんといふけふのうつくしさよ」の部分にも見られる「頬」という言葉も、「無声慟哭」三部作において多用され、三部作全体で計五回用いられている。三部作において「いもうと」や「とし子」、「おまへ」が示すトシに比べて、「頬」は、より直接的にトシの存在を表していると言える。

「そら／さはやかな／^{ターペンティン}terpentineの匂もするだらう」の「terpentine」とは、恩田氏の注によると、「松材を蒸留してつくる²⁵⁾油」のことであるという。黒沢氏は、この部分について、「病室に漂つて terpine (テレピン) 油。マツ科植物の樹脂を蒸留して得た油状揮発性の液」は、病室を清め、すがすがしい聖らかなさに満ちている²⁶⁾と述べている。蒸留する時に蒸気は上に立ち上り、それは「天上」へ上ろうとするトシを連想させよう。

第三章 「無声慟哭」

「こんなにみんなにみまもられながら／おまへはまだここであるし、まなければならぬか」という冒頭の、「まだ」という言葉から「永訣の朝」「松の針」と時間が連続していることが読み取れる。

「わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき／おまへはじぶんにさだめられたみちを／ひとりさびしく往かうとするか」の部分にもある「修羅」とは、衆生が行いによりおもむくとされる六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天）の一つであり、一般に、人は貪、嗔、癡により修羅に堕ちるとされる。賢治にとつての「修羅」とは、『新宮澤賢治語彙辞典』によると、次の通りであるという。

「修羅」が賢治にあつては劇的な矛盾としてとらえられており（中略）、より認識的な「修羅」や、教義的な「修羅」であっても、平面的な概念でなく、絶えず矛盾の超克を意図する賢治の激しい求道の意志によってダイナミックに諸作品の中で生動している。その代表的なものは、（中略）「まこと」との対立、そのための賢治の深い苦悩、そして止揚統一へと向う道程に、彼の全作品と全行動の様式が存在する。²⁷

つまり、賢治にとつての「修羅」とは、「矛盾の超克」、つまり到達不可能な事柄への激しい希求を意味するのである。島村輝は、

賢治にとつての「修羅」の視点からみた「無声慟哭」三部作について、次のように述べている。

（おまへ）の（ぐるし）みは三編を貫く不動のトーンになつていゝようにみえるが、事態は本当にそうだといいて良いのだろうか。（じぶん）にさだめられたみちを／ひとりさびしく往かうとするか（おまへ）ひとりどこへいかうとするのだ、これらの（わたくし）の（ことば）からは、すべて道連れを求めてやまない（修羅）としての（わたくし）の発想の中で妹とし子の臨終を見ることが明白である。²⁸

つまり、「無声慟哭」三部作は、死に際のトシの苦しうな状況を書いているにすぎず、島村氏が続けて「わたくし」ととし子の距離のなんと隔たつてゐることだろう。²⁹と述べているように、「たつたひとりのみちづれ」であるトシを求め賢治の主観的欲求が色濃いと言える。また、求めたところでトシは「とほくへいつてしまふ」のだから、それは決して叶わないという「修羅」の要素が根底にある作品群であると言えるのである。そのことは、「無声慟哭」という、声を出さない「無声」と声をあげて嘆き泣く「慟哭」の矛盾を示す題名からも、よくわかることである。

「おら おかないふうしてらべ」は、賢治の注によると、「あたしこわいふうをしてるでせう」という意味であるという。その後

に続く「うんにや ずるぶん立派だちやい／けふはほんとに立派だちやい」という母の返答は、恩田氏の注によると、「いいえ、ずいぶん立派ですよ」という意味であるという³⁰。これらの会話はトシと母の間で交わされたものであり、堀尾氏は、この部分について次のように述べている。

母イチ四十五歳、トシ二十四歳である。娘は母に何でも言える。長い病床生活の身なりを気にして聞いている。これは母だけにしか言えない甘えである。応える母のやさしさ、いたわり、はげましの言葉の密度はまさに母なればこそだ。まもなくトシは母におかゆを食べさせてもらった³¹。

また、黒沢氏もこの部分について、
母の言葉も見事な、本当に「立派な」言葉であり、母親らしいいたわりと母性愛からくる強さを感じさせる。臨終詩編の美しさ、その深い感銘は単に賢治のトシへの愛情の深さだけでなく、トシの賢治や家族を思う気持ち、母のこうした毅然とした強い愛情の表現、それらが揮然一体となつて、家族愛の表現ともなっている³²。

と述べ、両論者共に、母ならではの温かさや言葉の重み、そして、家族愛が感じられるとしている。兄と妹や父と娘にはない、母と娘の、全てをさらけ出せる強い信頼関係が、そこに表されている

のである。続く、「ほんたうにそんなことはない／かへつてここはなつのはらの／ちひさな白い花の匂でいつばいだから／ただわたくしはそれをいま言へないのだ／（わたくしは修羅をあるいてゐるのだから）」の部分において、賢治が「それをいま言へない」理由こそまさに、娘と母の間を邪魔してはいけなく、ましてや兄である自分が会話に入る余地はないという、到達不可能な「修羅」を「あるいてゐる」たからであろう。

「無声慟哭」最後の四行、「わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは／わたくしのふたつのころをみつめてゐるためだ／ああそんなにかなく眼をそらしてはいけなく」の「ふたつのころ」とは、何であろうか。天沢氏は、「最後の『かなく眼をそらしてはいけなく』というのは、（中略）これは妹に言つてのじやなくて自分自身に言つてゐる、というふうな解釈があつて、ここはそうとるかたらないかで非常に様子が変わつてくるところなのです³³。」と述べている。恩田氏の注によると、「ふたつのころ」とは、「妹に語りかけたい気持ちと、その資格がないと拒否する」との、「二律背反的心情³⁴」であるという。

注目したいのは、「わたくし」、つまり筆者である賢治自身の眼であるのに、「かなしい」ではなく、あえて「かなしさう」と客観的に書いている点である。「無声慟哭」三部作は、繰り返しになる

が、「一九二二、一一、二七」の日付が添えられ、トシが亡くなった当日のことが書かれている上に、天沢氏が、「とし子が死んでから書いたには違いない」と述べている。これらを踏まえると、「無声慟哭」三部作には、「一九二二、一一、二七」当日にトシを病室で見守っていた賢治と、後日に回想しながら詩を書く賢治の、二人の賢治が存在していると考えられるのである。そう捉えると、「かなしさう」としているのは、「一九二二、一一、二七」の賢治が「かなしい」目をしているのを、後日詩を書くもう一人の賢治が客観的に書いているからであると言えよう。また、「かなしく眼をそらして」いるのは、「かなしさうな眼をしてゐる」という部分と対応していることから、「わたくし」、つまり賢治だろうと考えられるが、そう考えた場合、「かなしさうに」、「眼をそらしている」のではなく、「かなしく眼をそらしている」ことから、「眼をそらしている」賢治は、「一九二二、一一、二七」のトシを見守る賢治ではなく、後日に回想し詩を書いている賢治であると考えられるのである。最後の四行には、二人の賢治の「ふたつのころ」が一つの時空に存在し、そういう混沌とした状況が、多くの論者を悩ませるのだろう。

第四章 文也とトシ

中原中也が二歳で亡くなった息子・文也へ捧げた詩集『在りし日の歌』の、第二部にあたる「永訣の秋」は、賢治の心象スケッチ（詩集『春と修羅』に収録されている「永訣の朝」と名前が酷似していることは、誰もが気づく点であろう）。

愛する者を亡くし、深い悲しみにさらされながらも、詩にその思いを綴った二人の詩人、中也と賢治の詩を比較して見えてくるものとは、何であろうか。

中原豊は、「秋」と「朝」の違いに着目し、「トシの死を契機にますます思索を深め実践を推し進めていった賢治と、文也の死を契機に新たな（詩生活）の展開をはかりつつ病に倒れた中也と、その思想と生き方とは、まさに始まりの時間としての（朝）と、ひとつの終末へと向かっていく（秋）という表現の違いに凝縮しているといえよう」と述べている。

中也が「永訣の秋」としたのは、文也が亡くなった日が、十一月十日と「秋」であったことが、大きな理由の一つであると考えられるが、中也は死の予感、終末の予感のようなものを感じ取ったために、そうした生命の終末を想起させる「秋」としたとも考えられよう。「永訣の秋」収録の、「一つのメルヘン」で描かれて

いる「秋の夜」も、文也の亡くなった季節や終末を暗示するものとしての「秋」というように捉えてよいだろう。

一方、賢治は「永訣の朝」としているが、トシが亡くなった時刻は午後八時三十分であり、永訣した時間帯が朝なのではなく、あくまで「永訣する日の朝」である。しかしながら、賢治が「夜」ではなく「朝」としたのは、中原豊も述べているように、トシの死という悲しみに押しつぶされ破滅に向かうことなく、「わたくしもまつすぐにすすんでい」こうという賢治の決心が、そこに表れているからなのである。

また、中也と賢治の詩の違いについてまず一つ言えることは、中也はその者を象徴的に、賢治は具体的に書こうとする、そうした詩の書き方の違いがあるということである。例えば、中也は、『在りし日の歌』収録の詩において、「含羞—在りし日の歌—では「死児等の亡霊」、「冬の日の記憶」では「愛してゐた子供」、「一つのメルヘン」では「蝶」、「月の光その一」では「死んだ児」、「春日狂想」では「愛するもの」、文也を事実に基づいて直接的に描こうとしたと考えられる「また来ん春……」においても「あの子」や「おまへ」で表されており、どの作品を見ても、「文也」という名前は、一切書かれていないのである。対して、賢治の「無声働哭」三部作を見ると、「いもうと」や「おまへ」と書かれている部

分もあるが、「とし子」という名前もはっきりと書かれているのである。なぜ、中也は、賢治から多大な影響を受け、様々に模倣をしているにもかかわらず、あえて「文也」という名前を詩に書こうとしなかったのだろうか。

吉田秀和によると、中也とともに動物園に行つた際の、次のような出来事があるという。

ある日のこと、彼が急に動物園に行こうといひだしたので、上野にいったのを覚えている。出かけるのが少しおそかったので、私たちは、最初の半分以上は、ろくに見もせず、せかせか歩きまわるだけ。(中略) そのうち白熊のところになると、中原が立ちどまつたので、二人して、長いこと見ていた。(中略) 中原は、いつまでも、その熊をあきもせず眺めていた。⁽³⁶⁾

さらに、吉田氏は、この日の出来事と中也の詩「また来ん春……」とを照らし合わせて、「私には、彼が愛児を悼んでいるのと、あの時私が見た彼自身の姿とが、この歌の中に二重になって映し出されているような気がする。(中略) 私には彼の詩の非常に多くが、自分で自分を悼んでいる挽歌としか思えないのだ」と述べている。⁽³⁷⁾

中也が詩に書こうとした「文也」が自分自身と重なって見えていた、つまりそれが、中也が「文也」という名前を詩に書かなかつ

た理由の一つであると考えられるのである。さらに、中也是、長男・文也を亡くす前に、弟・亜郎、友人・富永太郎、父・謙助、弟・恰三、祖母・スエ、祖母・コマなど、沢山の大切な人の死を経験している。文也だけでなく、こうした沢山の魂への追悼の意をも込めたために、また、文也が亡くなる前に書かれた作品は、何らかの死の予感を感じて書いたに過ぎないために、はつきり「文也」と断定的には書けなかつたとも考えられよう。

中也と賢治の詩の第二の違いは、中也の詩と賢治の詩は性質が全く違うということである。例えば、賢治の「無声慟哭」三部作では、様々な宗教や方言、哲学、自然科学などの要素が複雑に内在し、言葉が敷き詰められ濃密な詩であると言える。中也の「宮澤賢治全集」の、「彼が認められること余りに遅かつたのは、(中略) 詩人として以外に、職業、つまり教職にあつたためであらうか。所謂文壇交遊がなかつたためであらうか」という、賢治が、文学者以外の分野で活躍していたという部分からも、こうした賢治の詩の特徴を裏付けている。

一方、職業に就くことなく、詩人としての道を歩んできた中也の詩は、フランスの詩人・ポール・マリイ・ヴェルレーヌやフランスの作曲家・クロード・アシル・ドビュッシー、イングランドの劇作家、詩人のウィリアム・シェイクスピアなど、自らが専攻

してきたフランス語文学関連の要素や、様々な文学者と交遊し影響を受けたことなどを詩に取り入れている。つまり、賢治の詩は雑多で混沌としている一方、中也の詩は近代性が強く、シンプルであると言えるのである。

それでは、文也の死とトシの死の事実についてそれぞれ比較していこう。

文也とトシの共通点は、①各詩人の肉親であるという点、②若くして亡くなっているという点、③「秋」に亡くなっているという点、そして、④文也は小児結核が死因、トシは咯血の一年後に亡くなっていること(39)から結核が死因と推測され、この点も共通していると言える。以上、四点のような共通点に共感を抱き、また、賢治が自分と同じ詩人であつたことも共感の大きな要因となり、中也は賢治から、特に愛する者との永訣の詩の制作において、多大な影響をけたのではないかと考えられる。ちなみに、北川氏が、「順序から言えば、賢治が中也の詩を読んだことは、まず、ありえない。明治四十年生まれの中也よりも、二十九年生まれの賢治の方が、十一ほど歳上だからである」と述べているように、これも北川氏の言葉を借りると「影響のようなものがあるなら、これは疑問の余地なく、中也の側にしかない」ということをここで補足しておく。

一方、文也とトシの相違点を順に挙げていくと、①文也は男、トシは女であるという点、②文也は息子、トシは妹であるという点、③文也は朝、トシは夜に亡くなっているという点、④文也は約二年間、トシは約二十四年間各詩人と共に過ごしてきたという期間が違う点、⑤文也は理解者ではないが、トシは家族で唯一信仰を共にした良き理解者であったという点の、以上五点が、主に考えられるだろう。

中也にとつて、文也は初めての息子であり、家族で祇園祭、動物園、映画館、上野の万国博覧会、そしてサーカスなどへ一緒に出掛け、大きな愛情を注いでいた。また、中也の母・フクによると、中也は葬式当日、文也の遺体をだいて棺になかなか入れなかつたとい⁽⁴⁾、文也を亡くした悲しみが引き金となつてか、文也が亡くなつてからわずか約一年後に、文也と同じ結核性脳膜炎で、中也は息を引き取るのである。

中也にとつて文也とは、言わば天から舞い降りた天使や宝物のような存在であつた一方、前述したように自分と重なる部分があつた、つまり可愛い分身のような存在でもあつたのではないだろうか。対して、賢治にとつてのトシは、家族で唯一「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」であり、堀尾氏も、「妹トシは二つちがいだったから、一ばんきょうだいの中でも近しかった。

賢治の愛情は、このかしくやさしい妹に惜しみなく注がれ、妹はまたすぐれた頭脳をもつ兄を尊敬した⁽⁴⁾と述べていることから、一番の理解者であつたに違いない。また、堀尾氏によると、トシが息を引き取つた時に、「賢治は押入れに頭を入れて『とし子、とし子』と号泣した⁽⁴⁾そうであり、賢治のトシを失つた悲しみの深さがうかがえる。賢治は生涯未婚であつたこともあり、自分が注げる限りの全ての愛情を、妹・トシに注いだことだろう。

こうした、中也と文也、賢治とトシのそれぞれの、親子愛と兄弟愛のような愛の形の違いが、同じ運命を背負つた二人の詩人の作品の違いを生み出しているのかもしれない。

- 注(1) 『中原中也全集 第三卷 評論・小説』 中原中也著、大岡昇平・村松栄編(一九六七年十二月、角川書店)、「宮沢賢治全集」より引用。(p.86)
- (2) 『春と修羅』収録作品の本文の引用は全て『新修 宮沢賢治全集 第二巻』宮沢賢治著(一九七九年六月、筑摩書房)によるものとする。
- (3) 『新修 宮沢賢治全集 別巻』草野心平編(一九八〇年十二月、筑摩書房)の「宮沢賢治年譜(堀尾青史編)を参照。(p.11)
- (4) 『国文学 解釈と教材の研究』第二十巻第五号(一九七五年四月二十日、学灯社)の「無声慟哭から有声慟哭へ 宮沢賢治の歩みの修羅」の宗左近と天沢退二郎の対談より引用。(p.17)
- (5) 注4に同じ。(p.17)

- (6) 『宮沢賢治必携』佐藤泰正編（一九八一年三月、学灯社）の『春
マ修羅』第一集』を参照。(p.75)
- (7) 『医事学研究』第十八（二〇〇三年十二月十日、岩手医科大学）
の黒沢勉「宮沢賢治 妹の死——臨終詩編の考察・注解——」
より引用。(p.23)
- (8) 『日本国語大辞典 第二版第十二巻』日本国語大辞典 第二版編集
委員会・小学館国語辞典編集部編（二〇〇一年十二月、小学館）
の「薨」の項参照。(p.716)
- (9) 『ロレクシオン現代詩』大塚常樹・勝原晴希ら編（一九九〇年一
月、桜風社）の「生い立ちの歌」の大岡常樹「解説」より引用。
(p.2)
- (10) 『年譜 宮沢賢治伝』堀尾青史著（一九九一年二月、中央公論社）
を参照。(p.205)
- (11) 『日本近代文学大系 第36巻 高村光太郎・宮沢賢治集』飛高隆夫・
恩田逸夫注釈（一九七一年六月、角川書店）の「永訣の朝」（恩
田逸夫注釈）の注を引用。(p.348)
- (12) 注11の文献の「宮沢賢治年譜（恩田逸夫編）を参照。(p.496-
499)
- (13) 注11に同じ。(p.348)
- (14) 『イメージ・シンボル事典』山下主一郎訳者代表（一九八四年三
月、大修館書店）の「食べ(た)く」の項参照。(p.201, 202)
- (15) 注10の文献より引用。(p.207)
- (16) 注15に同じ。(p.208)
- (17) 注11に同じ。(p.350)
- (18) 注10に同じ。(p.208)
- (19) 『新宮澤賢治語彙辞典』原子朗著（一九九九年七月、東京書籍）
の「資糧」の項より引用。(p.84)
- (20) 注11に同じ。(p.350)
- (21) 注14の文献の「マツ」の項参照。(p.497)
- (22) 『歌ことば歌枕大辞典』久保田淳・馬場あき子編（一九九九年五
月、角川書店）の「松」の項参照。(p.804)
- (23) 『歌枕 歌ことば辞典』片桐洋一著（一九九九年六月、笠間書院）
の「ま(の)ゆき」の項参照。(p.386)
- (24) 注23に同じ。(p.386)
- (25) 注11の文献の「松の針」（恩田逸夫注釈）の注より引用。(p.352)
- (26) 注7に同じ。(p.41)
- (27) 注19の文献の「修羅」の項より引用。(p.350)
- (28) 『国文学 解釈と鑑賞』第六〇巻九号（一九九五年九月、至文堂）
の島村輝「無声慟哭」・「永訣の朝」・「松の針」より引用。(p.69)
- (29) 注28に同じ。(p.70)
- (30) 注11の文献の「無声慟哭」（恩田逸夫注釈）の注を参照。(p.353)
- (31) 注15に同じ。(p.208)
- (32) 注7に同じ。(p.46)
- (33) 注4に同じ。(p.27)
- (34) 注30に同じ。(p.354)
- (35) 『中原中也を読む 梅光学院大学公開講座論集 第54集』佐藤泰正
編（二〇〇六年七月、笠間書院）の中原豊著「亡き人との対話
——宮沢賢治と中原中也——」より引用。(p.82)
- (36) 『ソロモンの歌・一本の木』吉田秀和著（二〇〇六年二月、講談
社）より引用。(p.23, 24)
- (37) 注36に同じ。(p.25)
- (38) 注1に同じ。(p.98)

- (39) 注10に同じ。(p.205)
- (40) 『宮沢賢治を読む 梅光学院大学公開講座論集 第50集』右澤康之編(二〇〇二年五月、笠間書院)、北川透「宮沢賢治と中原中也——二つのプリズム——」より引用。(p.89)
- (41) 注40に同じ。(p.89)
- (42) 『私の上に降る雪は わが子中原中也を語る』中原フク述、村上護編(一九九八年六月、講談社)を参照。(p.217)
- (43) 注15に同じ。(p.135)
- (44) 注10に同じ。(p.166)

(二〇一七年度卒業)